Title	差異の恋愛学 今泉力哉映画研究ノート
Author(s)	応,雄
Citation	層 : 映像と表現, 15, 63-71
Issue Date	2023-03-22
DOI	10.14943/106286
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/88608
Туре	bulletin (article)
File Information	15_03_p63-71.pdf



差異の恋愛学(今泉力哉映画研究ノート

応 雄

「愛がなんだ」は今泉力哉監督の二○一九年作品のタイトル「愛がなんだ」は今泉力哉監督の二○一九年作品のタイトル「愛がなんだ」は今泉力哉監督の二○一九年作品のタイトル「愛がなんだ」は今泉力哉監督の二○一九年作品のタイトル

◇「好き」と「別れたい」

好きです。

ありがとう……でも、ごめんなさい。

な場面では、今泉力哉はひっきりなしに当事者の人物にセットまだ結ばれていない男女の間になされる愛の告白。このよう

このふたつの言葉の体現する関係そのものであろう。このようでこの類の台詞をふたつ口にさせる。『Mellow』(二〇二〇)では、同葉を返される。男同士の恋愛を描く『his』(二〇二〇)では、言葉を返される。男同士の恋愛を描く『his』(二〇二〇)では、言葉を返される。男同士の恋愛を描く『his』(二〇二〇)では、言葉を返される。男同士の恋愛を描く『his』(二〇二〇)では、方の女性に家まで送ってもらった車の中で、この女性に「好きです、付き合ってもらえないでしょうか」と言われる男が案のなんだ』では、セットとなるこのふたつの台詞こそ出現しないなんだ』では、セットとなるこのふたつの台詞こそ出現しないなんだ』では、セットとなるこのふたつの台詞とです。

な台詞や事象は今泉作品の全般にわたってみられるのである。

「好き」と言われた者は、それを告げた者とは別の人に「好

気にする気配もなしに。 気にする気配もなしに。 気にする気配もなしに。 あるいは、「好き」と言われた者がそれをき」の感情を抱く。あるいは、「好き」という事態をでいえば、「温度」の差がつねにある。恋愛の現実を定義づけていえば、「温度」の差がつねにある。恋愛の現実を定義づけていえば、「温度」の差がつねにある。恋愛の現実を定義づけている。恋愛関係にある人物間には、今泉監督の言葉を借りずにいる。恋愛関係にあるいは、「好き」と言われた者がそれをき」の感情を抱く。あるいは、「好き」と言われた者がそれを

別に気になる人がいる、と男は言う。 関に気になる人がいる、と男は言う。 愛の告白の台詞とほぼ同様な、あるいはより高い頻度で登場での席で恋人の彼女にたいしてついに「別れたい」という一言なく好意を抱いてしまう。それをきっかけに、恋人の誕生日祝なく好意を抱いてしまう。それをきっかけに、恋人の誕生日祝なく好意を抱いてしまう。それをきっかけに、恋人の誕生日祝なく好意を抱いてしまう。それをきっかけに、恋人の誕生日祝なく好意を抱いてしまう。それをきっかけに、恋人の誕生日祝といの席で恋人の彼女にたいしてついに「別れたい」という一言であるが、すでに結ばれている夫婦や恋人同士のあいだで告げするのが、すでに結ばれている夫婦や恋人同士のあいだで告げするのが、すでに結ばれている夫婦や恋人同士のあいだで告げするのが、すでに結ばれている夫婦や恋人同士のおいる。

に分有されるようになる。今日も、ここに来る前に女性店員にところが、それに続く二人の会話では、そうしたひどさが互いず別れようと口にしてしまう。ひどいとしかいいようがない。長年付き合う相手の誕生日祝いをしている最中にもかかわら

最後に男は、好きになってもらえなくてごめんなさいと言う。いたい」気持ちが一度でもあった?と聞くと、女は黙り込む。と言う。すると男は、俺と何年も付き合ってきて、正直、「会うは、「好き」よりは「会いたい」のほうが本当の気がする、

「別れたい」の一言が始まるやいなや、今泉は男女間のやり

においてみられるような、恋愛行為において必然的に存在するになる人がいる」といった、今泉作品にお馴染みの場面や台詞「別れたい」、男の「好きになりきれなかった」、女の「別に気存する。その意志とは、成就されない「好き」、恒常化する進める。そうした過程で男女の感情や思いはひたすら「別れてとりを、両者がぶつかり合いながら分岐してゆく方向へと推しとりを、両者がぶつかり合いながら分岐してゆく方向へと推し

◇「群像」と「群れ」

感情の余剰の部分を際立たせる、という断固たるものである。

ことが一目瞭然だ。このことが「群像」に直結する。ここでいろ「恋愛」の「不成立」あるいは「破局」のほうに傾いている今泉の描く「恋愛」情景の数々は「恋愛」というよりも、むし今泉の撮る作品はしばしば恋愛群像劇と呼ばれる。ところが、

会いに店に行った、と男が愚直にも告げたのを耳にした女のほ

えうるといったことによって生起する事象である。それぞれの言われる当の対象者もさらにそれぞれ「別に気になる人」を抱いる」ことによって、また当然ながら、「別に気になる人」とう「群」は、恋愛の当事者である男や女に「別に気になる人が

カップルが織りなす恋愛模様によって構築されるいわゆる一般

生する「群れ」の映画なのだ。
生する「群れ」の映画なのだ。
な恋愛群像の様式と異なり、今泉作品の人物設定には、「芋的な恋愛群像の様式と異なり、今泉作品の人物設定には、「芋的な恋愛群像の様式と異なり、今泉作品の人物設定には、「芋的な恋愛群像の様式と異なり、今泉作品の人物設定には、「芋

一)の後半、静かな住宅街で五人の青年男女が鉢合わせする早体と個体が結ぶそれぞれの関係が似通う。『街の上で』(二〇二男女関係をなしている。前者で個体同士が似通い、後者では個テルコ/マモルと仲原/葉子、そしてマモル/すみれは似通う

こうして四人の男と女が不意に遭遇するわけだが、そこに、昨を戻したい思いでバーを営む青年に恋の悩み相談をしていた。家で「恋バナ」を交換していた。男の元カノは、元カレとより

朝はなんだったのか。映画の撮影で知り合った若い男女は女の

であれ、早朝の「街の上で」姿を現し、言葉たちの乱射をするも突如加わってくる。よりを戻そうとする者であれ、しない者晩「恋バナ」をしていた映画撮影班スタッフである女の元カレ

いだの錯綜する関係に巻き込まれる人たちばっかりで、要はフこれらの人物たちはみな、元カノや元カレ、ついでに彼らのあ

のだ。そればかりではなく、「恋バナ」を交換していた男女と物Aが人物Bに比べて、あるいはBがCに比べて、CがDに比物Aが人物Bに比べて、あるいは異なりながら似通う「恋すある。彼らは似て非なる、あるいは異なりながら似通う「恋すある。彼らは似て非なる、あるいは異なりながら似通う「恋するジャッカル」たち、恋をしそこなう人間=ジャッカルたちなる。人ラットな恋のすれ違いの当事者、またはその関係者である。人

恋の悩み相談をしていた男女は、恋人同士ではないものの、

るいは「乱闘」であろう。通う個による、似通う関係に基づく人物間の言葉の「群舞」あスクリーンに生起しているのはもはや「群像劇」ではなく、似「付き合っている」と疑惑を持たれる点において相似形をなす。

◇ 「成長」と「生態」

剰」としての「一」という両者の内在的な統合があるだけだ。

や対立がなく、それぞれの人物としての「多」と恋愛の「余 会話するという『こっぴどい猫』(二〇一二)のあるシーン。 収める光景がよくみられる。たとえば、主人公の初老の作家 されたのも、そういった発想によるものだったのであろう。要 山田テルコひとりの物語であった原作『愛がなんだ』が、テル 者も結婚をいまだに躊躇する者も、みな「二股」を、恋愛の と夫に反論される……。結局は、男も女も、結婚をすでにした 義理の父の弟子入りした若い小説家と関係を持っていたのでは このことを知らないふりをして夫に突っ込みつづけるが、君も に知られる。夫が二股している事実をすでに把握していた姉は 現在、二股している相手はまさに弟の元カノだったことが観客 夫はこのことを非難するが、会話が進行するうちに、姉の夫が 結婚を控えている弟が元カノのことを忘れずにいる。彼の姉の 三人、またはそれ以上の複数の人物を横並びに配置し、 由によるのかもしれないが、今泉作品で山場となる場面 なくして、恋愛における男や女の「生態」を描くこと。同じ理 は、主人公山田テルコの、恋愛を通しての「成長」の物語では コを含む四、五人の男女の恋愛模様をめぐる同名映画へと改編 (モト冬樹) の息子と娘夫妻の三人が畳の上でこたつを囲んで 「余剰」を何らかの形で生きている。ここには、 人物間の対比 画面に

を感じつつ眺める最適なショットがこうして撮られるのである。 まい。群れをなす人々を、その温度差あるいはグラデーション 的な道具あるいはオブジェをなしていることに特段驚きはする には変わりがない。そうしてみれば、長ソファーが今泉の特権 はいえ、タブローのような平らな人物の配置をなしていること えるが、ここでは、 う彼女の高校の同級生である男という三人において、である。 このアパートの長ソファーに座る男と女、および女のことを慕 パートに行くのだが、別れについてのやりとりがなされるのが る女に別れを告げに行ってくると言って、この彼女の住むア ともに現れる。『サッドティー』では、男は妻に、二股してい に身を置き、言葉を交わす。かくて映画はクライマックスを迎 の浮気相手である雑誌の編集者の男性が三人掛けの長ソファー ファーに、その夫、夫の浮気相手であるカメラマンの女性、 配置の別バージョンでもあるかのような場面は、長ソファーと 言及した『こっぴどい猫』にあった、畳のうえでの平らな人物 トあるいは平らな画面構成が好まれると気づかれる。ただいま 猫は逃げた』(二〇二二)のラスト近く、妻が一人掛けソ 人物たちが二つのソファーに座っていると 今泉映画の会話シーンでフラッ

がやりとりしたりしているのを画面に収める縦の構図が、とりがやりとりしたりしているのを画面に収める縦の構図が、とりますであるほど、これで「ショット」2が撮れていない、ことが呟かれるのだろう。「ショット」はあまり撮れていない、ことが呟かれるのだろう。「ショット」はあまり撮れていない、ことが呟かれるのだろう。「ショット」はあまり撮れていない、ことが呟かれるのだろう。「ショット」はあまり撮れていない、ことが呟かれるのだろう。「ショット」はあまり撮れていない、とひとまず言っておく。いま触れたばかりの『猫は逃げた』の四人の主要人物が横一列に並べられる画面構成における着想の四人の主要人物が横一列に並べられる画面に収める縦の構図が、というさせるものではないことが一目瞭然だ。ところが、奥行きに配置される一人掛けソファーに妻を、手前のほうに置かれる三人掛けソファーに妻の浮気相手である編集者の男を座らせ、二人掛けソファーに妻の浮気相手である編集者の男を座らせ、二人掛けソファーに妻のではないことが一目瞭然だ。ところが、奥行きに配力ではない。

た感情や経験が人々に平等に分有されていることを視覚的に示ショットになると、あたかも「浮気」あるいは「二股」といっぞれ捉えられていたが、クライマックスで四人が横一列に座る妻の浮気相手と夫の浮気相手、四組の男女の関わり合いがそれ鎖において、妻と夫、妻とその浮気相手、夫とその浮気相手、

されたショット、あるいは縦の構図を排除しないショットの連

の断固たる意志によるものだと認識されうる。縦の構図を選択いま触れた、人物たちが横一列に並ぶようなショットは、監督

わけ本作の前半に幾度なく選択されていた。そうだとすれば、

ファーの並列に賭けたのだ。うに、監督は長ソファー、あるいは一人掛けソファーと長ソうに、監督は長ソファー、あるいは一人掛けソファーと長ソすためにはこのような横の構図以外に選択肢がなかったかのよ

このショットでは、妻は最初、夫の浮気相手を責め立てるが、夫の浮気相手に「そっちも浮気をしてるじゃん」と言われると、中り返そうとしてそうしただけだと言い返す。すると、同席している妻の浮気相手の男から「そういう軽い気持ちだったんですか」と聞かれる羽目になるわけだが、これを受けて夫の浮気相手を厳しく詰問していた妻は忽然と言葉を濁すしかなくなってしまう……。「余剰」の経験の平等というか、恋愛におけるてかう意味において、同席している四人はみな平等なのだ。このことを捉えるためには、今泉にとっては横一列のような構図が必要だったのであろう。猫が逃げたとともに、人物の関係が急展開を迎え、画面も縦の構図から横の構図へと向かっていく。こうして、「ショット」ならざる今泉の横の構図によるショットがわれわれを魅了するのである。

屋でしてしまったことを謝る。

◇ラーメンと「落とす」こと

だから恋愛をする人々、あるいは同じことになるのかもしれ

ラーメンでもと思って、と仲原は言う。なんでラーメンなの?

おこう。ないが、恋愛をしそこねる男や女にはラーメンでも食べさせて

はヒロインである店の経営者の女に、このような話をラーメンその話し合いが破局し、女は店を後にする。飲食代を支払う男別がラーメンを食べている。すると、隣の席で三十代後半か四男がラーメンを食べている。すると、隣の席で三十代後半か四男がラーメンを食べている。すると、隣の席で三十代後半か四男がテートであるはずのやりとりをしつづける情景が映される。別かートであるはずのやりとりをしつづける情景が映される。別が見いのでは、父親から受け継いだラーメン屋で、主人公である花屋の営む、父親から受け継いだラーメン屋で、主人公である花屋の営む、父親から受け継いだラーメンとなる女が別が上げる。

と思っていることを告げるのだが、もう会えないから最後にと思っていることを告げるのだが、もう会えないから最後には相応しい場所がほかにありえたにもかかわらず、な話をするのに相応しい場所がほかにありえたにもかかわらず、今泉は何の忌憚もなく庶民的な食事処であるラーメン屋を選択する。『愛がなんだ』では、葉子という女への片思いで苦しんでいた仲原という男がラーメン屋で、同じく男への片思いをする。『愛がなんだ』では、葉子という場には相応しくないことを男が謝ったのはラーメン屋という場には相応しくないことを男が謝ったのはラーメン屋という場には相応しくないことを

が、語られたこの厄介な瞬間は挿入されたフラッシュバックの 女性と後日下北沢のラーメン屋で鉢合わせしていたことを話す 性と「恋バナ」をしている男は、自分の初めていった風俗店の は困惑する。また、『街の上で』では、映画製作スタッフの女 ば恋愛、男女の別れといったものに結びつくのだろうか、と人 短時間で食事を済ませるラーメン屋は、どのような理路を辿れ カットで提示される。監督のラーメン、ラーメン屋への拘りは

な、飲食に関する監督の個人的嗜好への憶測に、あるいは作中 ただ、この事象は、ラーメンが好きなのだろうといったよう

尋常ではないのだ。

が追加されたと理解されうる。「落とす」という今泉のメソッ されてしまいそうな対象にならないように、「落とす」とでも する。このことは、仲原が「ただのいい人」、可哀そうで同情 いい人で去っていくのでつまんないと思ったんです」。と説明 アーの質問に、今泉は「このまま終わったらナカハラがただの 吐いて去るのだが、なぜ唾を吐かせたのかというインタービュ ストア付近でテルコと言葉を交わした後、奇妙にも仲原が唾を いえる、人物を平らにする今泉の演出によってこの細部の描写 人物の社会的地位や職業柄に基づく解釈に委ねてはならない。 『愛がなんだ』のラーメン屋に次ぐシーンで、コンビニエンス

> くて~~」と言った主人公の男に差し上げる どうぞ」と、もらったばかりの二本のうちの一本を、「僕もな ぐさま隣の喫煙中の男に「たばこ二本もらえませんか」と尋ね その直後に喫煙コーナーで主人公の男に「たばこ一本もらえま る。 る。それで二本のメンソールをゲットした彼女は「よかったら せんか」と言うが、「僕もなくて~~」と言われると女性はす 歌われる悲しげなソングを聴きながら涙を零す若い女性が、

性の感じが良くなりすぎてしまいそうだから「落とす」を作動 ま新鮮な経験の刺激を味わってもいるだろう。この事例では女 していた男は、たばこを頂戴し困惑するが、整理のつかない たったいまライブハウスで涙を零す女性の清楚な横顔 を目

うる。『愛がなんだ』の山田テルコが、片思いをする男のマモ 「下げる」があるのならば、その反対である「上げる」もあり のすみれと三人で食事する場面がある。レストランの席で「好 ルに呼び出されて、マモルと、マモルが片思いをしている年上 うだから「落とす」を作動させる。ただ、「落とす」あるいは させる。『愛がなんだ』の、唾を吐く場面では感傷的になりそ

怒りの独り言を口にせずにはいられなくなる。まさに

れたマモルにあっさりと放置されてしまい、一人で歩きながら

ドは、

たとえば『街の上で』のライブハウスの場面にもみられ

の上がる場面だが、そこで何が起きたのだろうか。独り言のつ ト版の、 人類普遍的な経験の相関物である。

で、大きは回りた。そこで何かまでありつづけるよう留意する。また、ラップになりかけたところで、映画はあたかもある。また、ラップになりかけたところで、映画はあたかもまる。また、ラップになりかけたところで、映画はあたかもきはその怒りが一定の値まで上がってしまうと、つぶやきでなくなるのだ。一方、ラップもその「微温」の状態に留めておき、くなるのだ。一方、ラップになろうとしたところで、ラップであるうことをやめさせる。つぶやきの「微温」の状態に留めておき、で上がると、感情を爆発させる代わりに当の言動の形態を変まで上がると、感情を爆発させる代わりに当の言動の形態を変更させ、二つの形態とも「微温」でありつづけるよう留意するで上がると、感情を爆発させる代わりに当の言動の形態を変更させ、二つの形態とも「微温」でありつづけるよう留意する。したが今泉流のメソッドではないか。

のとはかぎらない。ラーメンは、恋愛に関するプロレタリアーバーといった高級な場所においてインテリ同士で行なわれるもいたるところに生起しうる。それをめぐるやりとりはホテルのまつわるデリケートな話をする場所の要件を「落とす」「下げまつわるデリケートな話をする場所の要件を「落とす」「下げました流れの論理を鑑みれば、ラーメンへの拘りは「落と上述した流れの論理を鑑みれば、ラーメンへの拘りは「落と

学はこのこと、このことのみをその独自の流儀によって演じつ学はこのこと、このことのみをその独自の流儀によって演じつではながら、愛の発生を慫慂する。差異と反復、今泉映画の恋愛はながら、愛の発生を慫慂する。差異と反復、今泉映画の恋愛はながら、愛の発生を慫慂する。差異と反復、今泉映画の恋愛はながら、愛の発生を慫慂する。差異と反復、今泉映画の恋愛はながら、愛の発生を慫慂する。差異と反復、今泉映画の恋愛はながら、愛の発生を慫慂する。差異と反復、今泉映画の恋愛はながら、愛の発生を慫慂する。差異と反復、今泉映画の恋愛はながら、愛の発生を慫慂する。差異と反復、今泉映画の恋愛はながら、愛の発生を慫慂する。差異と反復、今泉映画の恋愛はながら、愛の発生を慫慂する。差異と反復、今泉映画の恋愛はながら、愛の発生を慫慂する。差異と反復、今泉映画の恋愛はながら、愛の発生を慫慂する。差異と反復、今泉映画の恋愛においる。

注

づける。

1「『愛がなんだ』今泉力哉監督インタビュー https://www.nobodymag. 2 この用語は、蓮實重彦が『ショットとは何か』(講談社、二〇二三) 2 この用語は、蓮實重彦が『ショットとは何か』(講談社、二〇二三)

具体的には、たとえば本書がニコラス・レイの『理由なき反抗』(一九五五)の中盤にある「真っ赤なジャンパーをまとったジェーム大五五)の中盤にある「真っ赤なジャンパーをまとったジェームだ。ディーンが二階に通じる階段で母親と口論する場面」に触れた際に語られている、一階にいる父親も含めた高低差のはっきりついた三人を捉える際のカメラの傾斜、およびそれによる空間のゆがみた三人を捉える際のカメラの傾斜、およびそれによる空間のゆがみを画面に定着させるショットのこと(六四―六七頁)。

「愛がなんだ』今泉力哉監督インタビューhttps://www.nobodymag.com/journal/archives/2019/0417_1957.php、2023/02/05閲覧。com/journal/archives/2019/0417_1957.php、2023/02/05閲覧。

2020年2月上旬号、№一八三〇、九七頁。